



株式会社 郵便

〒151-8502

渋谷区千駄ヶ谷1-20-6

FAX (0120) 779-783

TEL (0120) 025-315 (自動車保険)

(0120) 025-375 (総合保険)

(0120) 025-915 (がん保険)

(0120) 221-220 (医療共済)

「梅雨」と「梅雨入り」は違う？

6月と言えば、憂鬱な雨が続く梅雨(つゆ)が思い浮かびます。報道でも『梅雨入り』などの言葉が聞かれるのも6月です。沖縄から始まり、北海道まで次々と『梅雨入り』していく様子は、やはり6月の風物詩ですね。この『梅雨入り』と「入梅」、厳密に言えば、違うということをご存じでしょうか。今回は「入梅」と『梅雨入り』の違いをご紹介します。



梅雨の意味は？

例年、6月の『梅雨入り』から7月の『梅雨明け』まで、長雨が降り、湿度も高くなってじめじめした日が続きます。梅雨というのは、ちょうど梅の実が熟す頃に雨が降ることからつけられた名前とされています。他にも、木の葉などにおりる露(つゆ)をさす、カビが生えて色々なものが悪くなる時期のため黴雨(ばいう)という、などの諸説もあります。



「入梅」は雑節のひとつ。

雑節とは、日本の季節の移り変わりを表したもので、主に農作業に深くかかわっています。雑節には「節分」、「お彼岸」、「社日」、「八十八夜」、「入梅」、「半夏生」、「土用」、「二百十日」、「二百二十日」があります。雑節の「入梅」は、太陽黄経が80度に達した日を指しますが、立春から数えて135日目にあたる6月10日頃が目安とされています。田植えなどの農作業にとっては恵みの雨でもあり、大切な季節でもあります。2025年の雑節の入梅は6月11日(水曜日)です。



「梅雨入り」は気象用語。

一方、『梅雨入り』や『梅雨明け』は気象用語であり、実際の梅雨の期間のことを表します。天気予報などと言う『梅雨入り(梅雨入り宣言)』は、実際の梅雨前線の影響を受けたときに発表されます。『梅雨入り』の平年値は、10年ごとに更新され、2021年に各地の『梅雨入り・梅雨明け』の新しい平年値が更新されました。2031年まで使用される新平年値では、梅雨入り・梅雨明けの時期については大きな変化がありません。



なぜ雨が降り続く？

梅雨の原因は、東南アジアでみられる気象状況によるものです。大陸の冷たい高気圧と、太平洋の暖かい空気がぶつかり、大気の状態が不安定になり、そこで発生した梅雨前線が日本列島の付近に停滞するため、雨が続きます。雨の日でも蒸し暑い日と涼しい日があるのは、ふたつの気圧のせめぎ合いのためです。

梅雨の季節は、湿度も温度も高いため、食品がいたみやすく、食中毒になりやすい季節です。調理器具やキッチンには常に清潔を保ち、調理前は手を消毒する習慣をつけるなど、食中毒対策もお忘れなく。



6月の安全運転のポイント



警察庁の発表によると、令和6年の交通事故による死者数は2,663人で、前年よりも減少しました。今回は、令和6年の交通死亡事故の主な特徴は以下のとおりです。（資料は、警察庁「令和6年中の交通死亡事故の発生状況及び道路交通法違反取締り状況等について」による）

【令和6年の交通事故発生状況】

発生件数※ 290,895件（前年比 -17,035件 -5.5%）
 死者数※ 2,663人（前年比 -15人 -0.6%）
 負傷者数※ 344,395人（前年比 -21,200人 -5.8%）

※発生件数とは、人身事故件数をいい、物損事故は含まれません。
 ※死者数とは、交通事故発生から24時間以内に死亡した人数をいいます。

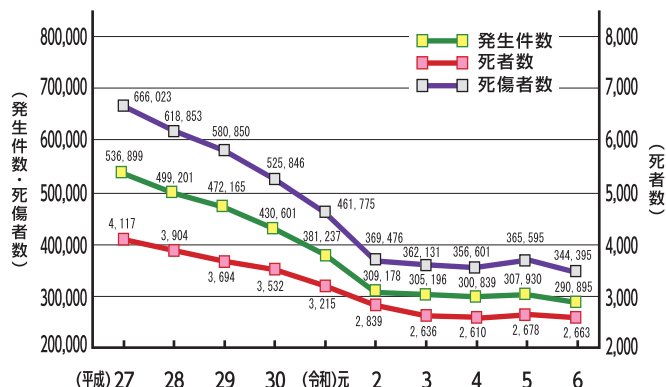


図1 交通事故発生状況の推移(平成27年～令和6年)

65歳以上の高齢者が交通事故死者の6割近くを占める

年齢層別に死者数をみると、65歳以上の高齢者が1,513人で(図2)、全死者数に占める割合は56.8%と6割近くを占めています。

65歳以上高齢者の死者数を状態別にみると、歩行中が663人(43.8%)、自動車乗車中が507人(33.5%)、自転車乗用中が226人(14.9%)、二輪車乗車中(自動二輪、一般原付、特定原付)が111人(7.3%)で(図3)、歩行中与自転車乗用中を合わせると6割近くを占めています。

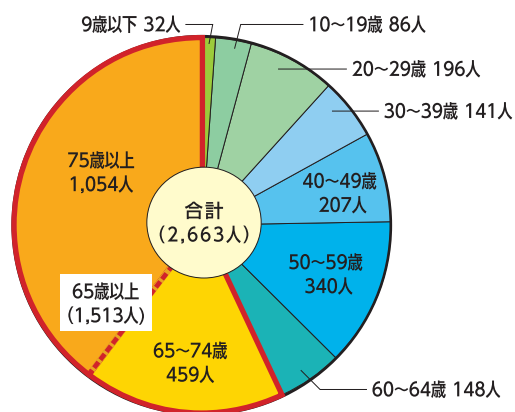


図2 年齢層別死者数(令和6年)

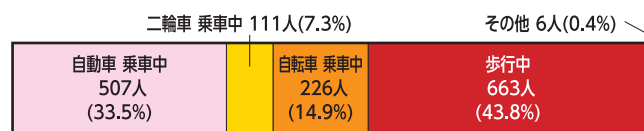


図3 65歳以上の状態別死者数(令和6年)

人対車両の「横断中」が最も多い

死亡事故を事故類型別にみると、人対車両が919件(35.4%)、車両相互が909件(35.0%)、車両単独が734件(28.3%)となっています(図4)。

事故類型の内容をみると、人対車両の「横断中」606件(23.3%)が全体の4分の1近くを占め、次いで車両単独の「工作物衝突」456件(17.6%)、「出会い頭衝突」の260件(10.0%)となっています。

横断歩道の無い場所であっても横断してくる歩行者は少なくありませんから、決して油断せず、歩行者の動きに十分に注意して走行しましょう。

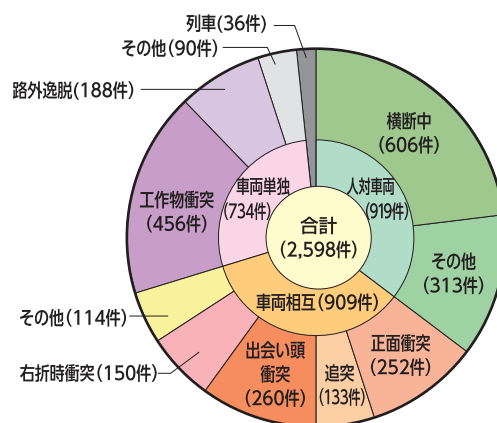


図4 事故類型別死亡事故件数(令和6年)

道路形状別では、交差点内とその付近が死亡事故の半数近くを占める

死亡事故件数を道路形状別にみると、交差点内が876件(33.7%)、交差点付近が306件(11.8%)を占め、交差点内と交差点付近を合わせると45.5%と全体の半数近くを占めています(図5)。

交差点とその付近は、事故が発生しやすい場所ですので、できるかぎり安全な速度と方法で走行しましょう。

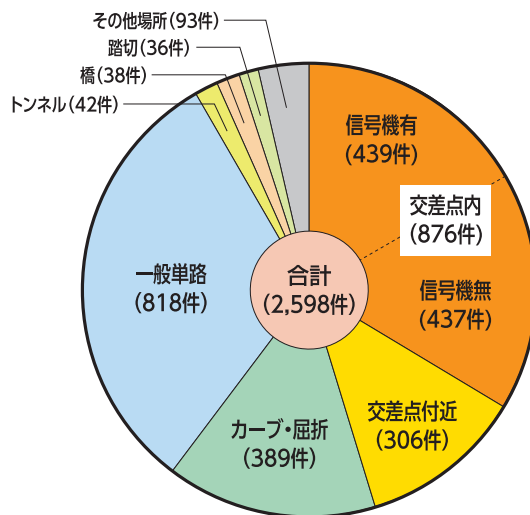


図5 道路形状別死亡事故件数(令和6年)

法令違反別では、「運転操作不適」が前年より増加している

原付以上の運転者が第1当事者となった死亡事故を法令違反別にみると、「漫然運転」が336件(14.5%)、次いで「運転操作不適」307件(13.2%)、「脇見運転」272件(11.7%)、となっています(図6)。

前年に比べて特に増加しているのは、「運転操作不適」(43件増)です。「運転操作不適」とは、急ハンドルや急ブレーキ、ペダルの踏み間違いなど不適切な運転操作を言います。速度を出し過ぎないようにするとともに、できるだけ先の危険を読んで急ハンドルや急ブレーキの必要がない運転を心がけましょう。

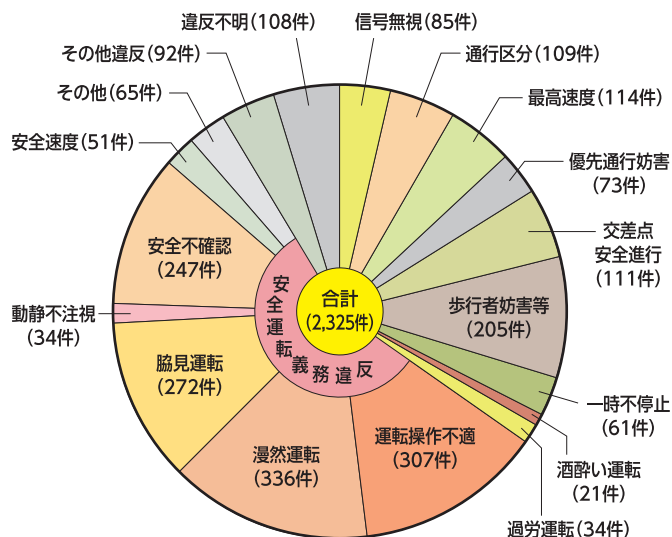


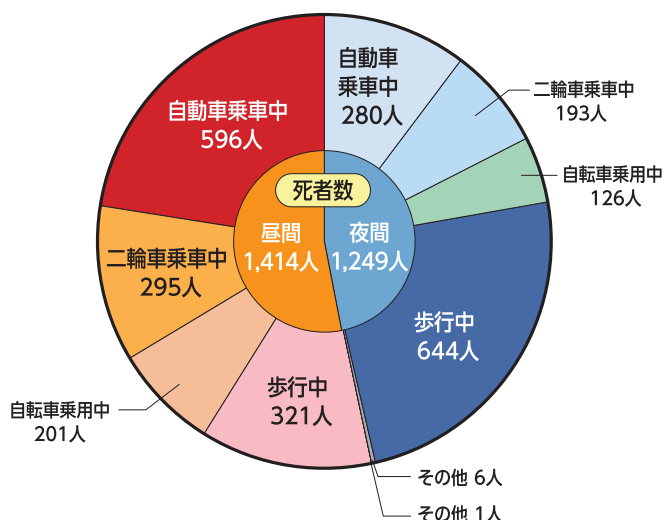
図6 原付以上運転者(第1当事者)の法令違反別死亡事故件数(令和6年)

昼夜別*の死者数では、夜間の歩行中の死者数がほぼ4分の1を占める

死者数を昼夜別にみると、昼間が1,414人(53.1%)、夜間は1,249人(46.9%)となっています。

昼夜別・状態別でみると、昼間は自動車乗車中が596人(22.4%)で最も多いのに対して、夜間は歩行中が644人(24.2%)で最も多く全死者数のほぼ4分の1を占めています(図7)。

夜間は、歩行者の発見が遅れやすくなりますので、早めにヘッドライトを点灯するとともに、昼間よりも速度を落して運転しましょう。



*「昼間」とは日の出から日没まで、「夜間」とは日没から日の出までをいいます。

図7 昼夜別の状態別死者数(令和6年)

6月は「衣替え」の季節。 「衣替え」の深い意味とは？



「衣替え」は、6月1日を目安に春・冬服から夏服へと替える風習です。平安時代には宮中行事として年に2回(旧暦4月・10月)、衣を替えていました。江戸時代になると着物の種類が増え、年4回、春夏秋冬の「衣替え」が武家社会で定められ、庶民にも広がりました。やがて明治時代に洋服が主流になると、役人や軍人などが制服を着るようになり、夏服と冬服を年に2回替えるようになりました。この衣替えの意識が一般にも浸透し、現在に至っています。



一斉に「衣替え」をする文化的な意義は？

明治時代、一般家庭でも「衣替え」の日(6月と10月)を目安に季節に合わせた衣服を着用するようになりました。その背景には、日本ならではの感性があります。とくに大切にしていたのが季節感で、季節を先取りするのは良いけれど、過ぎた季節をひきずるのは野暮だとされていました。そうした文化的意義からも、季節に応じた装いができるよう、家庭でも6月1日を目安に「衣替え」を行うようになったと言われます。



「衣替え」は単なる家事ではありません。

このように、「衣替え」には日本の感性が息づいており、「衣替え」を通じて衣服の季節感を養ったり、衣服の手入れ・管理・整理整頓のしかたを身につけたりしてきました。その観点から言えば、暮らしの行事は季節の巡りとともに繰り返されるので、「衣替え」は単なる家事ではなく、とても変意義ある『行事育』でもあると言えます。「衣替え」の根底には、日本人が育んできた季節感や文化があるということを忘れないでください。

「時の記念日(6月10日)」の由来は？

毎年6月10日は「時の記念日」です。これは、大正9年(1920年)に、東京天文台(現在の国立天文台)と、財団法人・生活改善同盟会によって制定された記念日です。なぜ6月10日だったのか？ これには諸説ありますが、ひとつには歴史的に深い理由があると伝えられています。



昔の日本は時間にルーズだった？

現在の日本人は、時間にとっても正確だと言われます。ところが、明治時代頃までは、時間にルーズだったようです。日本ではまだ時計が普及しておらず、お寺などが2時間ごとに鳴らす鐘の音しか時間を知る手がなかったためと言われます。現在のように時間を正確に守るようになったのは、時計の普及とともに、「時の記念日」が制定されたことが、ひとつのきっかけになったのかもしれない。



記念日の制定の由来は、日本書紀の記述にまで遡る？

「時の記念日」が6月10日になった由来のひとつは、日本書紀の記述にあると言われます。日本書紀の『天智10年4月24日』の項目に、『漏刻(ろうこく)を新しい台(うてな)に置いたら、初めて時を刻み、金を打ち鳴らした』という一文があります。漏刻とは水時計のことであり、天智10年4月25日は、太陽暦になおすと671年6月10になります。「時の記念日」が6月10に制定された由来のひとつには、日本書紀の記述にまで遡る、日本人の時間に対する向き合い方があったようです。